

縄文土器の底部

松岡 敦子

梨野A遺跡出土の縄文土器底部資料は、遺構、基本層Ⅰ～Ⅳ層、風倒木痕中より988点出土しており、底部圧痕の有無と種類によって編物痕、木葉痕、無文（全面研磨され何らの圧痕も認められないもの）、不明圧痕、不明に分類した。

編物痕を有する底部は、編物痕のみで研磨が及んでいないもの76点、編物痕に研磨が及んでいるもの81点、全部で157点である。編物痕が認められるものが全体の中で示める割合は15.9%である。編物痕に研磨が及んでいるものには、一部研磨、周辺研磨そして全面研磨しているものがある（全面研磨はむしろ無文の範囲に含まれるものであるが底部破片資料のため研磨の範囲を明確にしえないため、研磨の範囲による細分は行なわなかった）。

木葉痕を有する底部は、木葉痕のみ15点、木葉痕に研磨が及んでいるもの25点、全部で40点（4.0%）である。無文は154点（15.6%）、何らかの圧痕と思われる不明圧痕は4点、不明（小片のため分類不可能の遺物も含む）は633点である。

また、底部研磨の有無より分類すれば研磨の及んでいる遺物は、全体の中で264点（26.7%）で3割近くになる。

1. 編物痕について（第190図、第192図1～11）

編物痕を有する底部157点のうち編み方が判別できる底部は、41点である。編物型式は3型式に分けられそのうちⅢ類については「おもて」と「うら」の圧痕がある（第28表）。各型式に組織図、その下に単位（編み方に規則性がある場合、繰り返しの単位がある）、編み方の説明を載せた。図の表示は、タテの材がヨコの材の上にあるところを斜線、タテの材がヨコの材の下にあるところを白で示した。

Ⅰ類……「1本越え 2本潜り 1本送り」に編まれているもの（第190図1）

Ⅱ類……「2本越え 3本潜り」に編まれているもの（2）

Ⅲ類「おもて」……「4本越え 2本潜り」に編まれているもの（3）

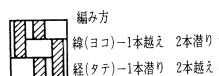
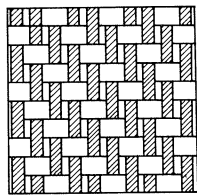
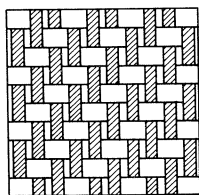
「うら」……「4本潜り 2本越え」に編まれているもの（4）

Ⅰ類は、「1本越え 2本潜り 1本送り」に編まれているもので左1本送り9点、右1本送り13点で計22点（53.7%）出土しており本遺跡において一番多い編み方であり、又、

第28表 底部の編物圧痕型式と数量

型 式	Ⅰ 類	Ⅱ 類	Ⅲ類のおもて	Ⅲ類のうら	計
計	22	1	10	8	41
%	53.7	2.4	24.4	19.5	100

1. I 類

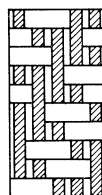
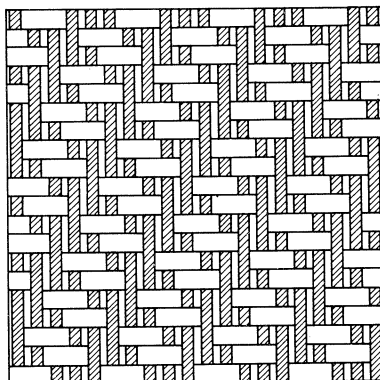


編み方
緯(ヨコ)→1本越え 2本潜り
経(タテ)→1本潜り 2本越え



編み方 緯(ヨコ)→2本潜り 1本越え
経(タテ)→2本越え 1本潜り

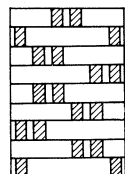
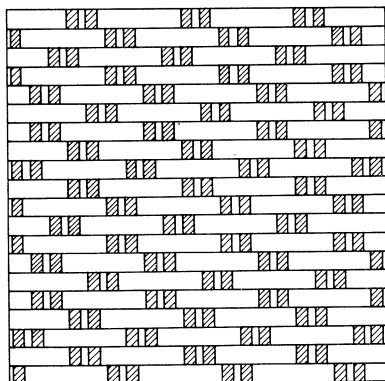
2. II 類



編み方 緯(ヨコ)→2本越え 3本潜り

経(タテ)→1本潜り 4本越え 1本潜り 1本越え 2本潜り 1本越え

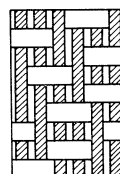
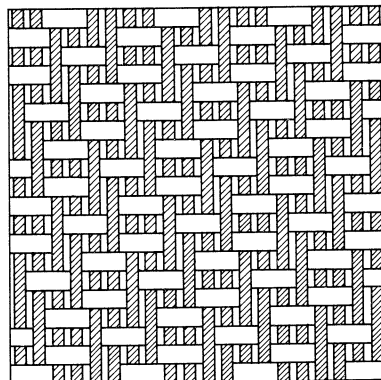
3. III 類「おもて」



編み方 緯(ヨコ)→4本越え 2本潜り

経(タテ)→1本越え 1本潜り 1本越え 4本潜り 1本越え 1本潜り

4. III 類「うら」



編み方 緯(ヨコ)→4本潜り 2本越え

経(タテ)→1本潜り 1本越え 1本潜り 4本越え 1本潜り 1本越え

第190図 編物模式図

I 類は東日本に多くみられる編み方と報告されている。^{註1)}第192図1はI類に編まれている。2は研磨されている。材の幅はヨコ2～4.5mm、タテ2～5mmであるが3は晩期の土器の底部であり材の幅はヨコ1～1.5mm、タテ1.5～2mmと細い材で編まれており、他のI類の圧痕とは異なる感じを受ける。又、タテヨコの材の他にナナメの材が加わっているものがある。

II類は、「2本越え 3本潜り」に編まれているもので1点(2.4%)出土しており、4は編物の上で土器を成形した後、底部に粘土を足して全面研磨したものと考えられ、一部粘土の剥れたところより編物痕が観察された。敷物利用後に底部に粘土を足した例は、宮城県山口遺跡^{註2)}、六反田遺跡^{註3)}でもみられる。又、同じ編み方は京都府桑飼下遺跡^{註4)}より出土している。材の幅はヨコ1～3.5mm、タテ1～2.5mmと細い材で編まれている。

III類は、模式図の編み方説明より、III類の「おもて」で越え、潜りになっている部分がIII類の「うら」では潜り、越えになっており、III類は「おもて」と「うら」の編み方が観察された。又、「おもて」と「うら」の送りは左右対称なので同一の敷物利用の可能性が考えられる。III類の「おもて」は、「4本越え 2本潜り」に編まれているもの10点(24.4%)出土、III類の「うら」は、「4本潜り 2本越え」に編まれているもの8点(19.5%)出土しておりI類に次いで多い編み方である。同じ編み方は、III類の「うら」は福島県八景腰巻遺跡^{註5)}、III類の「おもて」は宮城県青島貝塚^{註6)}、袖窪貝塚^{註7)}、III類の「おもて・うら」は、六反田遺跡^{註3)}で出土しており、但し、「おもて」の送りは左送りで本遺跡では右送りである。5はIII類の「おもて」に編まれており、6は材に筋又は2本組の材で編まれている。7、8はIII類の「うら」に編まれている。材の幅はIII類の「おもて」はヨコ1.5～8.8mm、タテ2～5mm、III類の「うら」はヨコ2.5～5mm、タテ2.5～4mmである。

9、10、11は編み方不明である。底径については、編物痕を有する底部を底径よりみると底径5.0～14.9cmの範囲であり底径10.0～11.9cmが多い。

2. 木葉痕について(第192図12～14)

木葉痕を有する底部は40点出土している(木葉痕のみ15点、木葉痕に研磨が及んでいる25点)。14は木葉が2枚重なっていると思われる。又、六反田遺跡でみられたような木葉と編物のだぶる底部は、観察されなかった。

底径については、底径5.0～11.9cm、13.0～13.9cmの範囲であり、底径10.0～10.9cmが多い。又、底径10.0cm以上の底部は8点である。

3. 不明圧痕について(第192図15・16)

何らかの圧痕と思われる底部で研磨が及んでいるもので4点出土している。

4. 底部を利用している遺物について

土製円板の中で底部を利用している遺物が3点出土している。無文が2点であり、もう1点は編物痕で研磨が及んでいるもので、編み方はⅠ類である。

5. まとめ

底部圧痕より当時のカゴ、敷物の編み方を間接的に知ることができるが^{註8)}編物痕においては、本遺跡では越えと潜りの数の異なる3型式の編み方がみられる。一番多い編み方は、Ⅰ類…「1本越え 2本潜り 1本送り」であり、東日本に多い編み方とされている。^{註1)}次いでⅢ類、Ⅱ類となる。Ⅰ類とⅢ類で97.6%を占める。又、Ⅰ類とⅢ類の編み方は、六反田遺跡出土の^{註3)}大木10式末葉～後期初頭の底部にみられる編物型式のⅡ、Ⅵ類に対応して、六反田遺跡でも編物痕の87.2%（編み方不明を除く）を占めて最も多い編物型式である。

又、青島貝塚出土の底部で当遺跡底部Ⅲ類の「おもて」に相当する拓影図30の4はカゴなどの容器の底～胴部の編み方の圧痕と思われる(191図)。^{註6)}底あみはタテヨコ4本1組の材で網代あみ(3本とび)で、胴あみはⅢ類の「おもて」の編み方である。又、六反田遺跡出土のⅥ類の「うら」(本遺跡のⅢ類の「うら」)の底部で拓影第7図の10は、タテの材が扇形に開いている(第191図)。^{註3)}以上の事から2遺跡の例ではあるが本遺跡のⅢ類の「おもて、うら」は、カゴなどの容器の胴あみの可能性が考えられる。

時期は、晩期の第192図3(Ⅰ類)の他は出土した遺構、層位より大半が中期後葉～後期初頭及び晩期と思われる。そして近年調査され、詳細な報告書の刊行されている宮城県の遺跡である上深沢遺跡の^{註9)}大木9式土器、^{註10)}菅生田遺跡の大木10式土器の底部には編物痕が観察されるものが非常に少ない。又、西ノ浜貝塚4層出土の大木10式土器の底部には編物痕がいくつかみられるが、同土器は大木10式でも後半とされるということなどから、本遺跡出土の編物痕を有する底部の多くが大木10式の後半段階から後期初頭に位置づけられる可能性も考えられる。^{註11)}^{註12)}^{註13)}

最後に底部をまとめるにあたって佐藤甲二氏、田中則和氏ははじめご指導下さった方々に深く感謝致します。

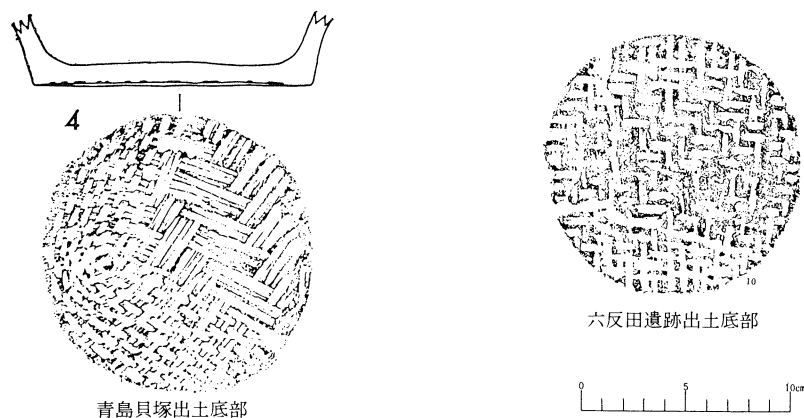
註

1. 安孫子昭二 「平尾No19遺跡 網代痕について」『平尾遺跡調査報告Ⅰ』 南多摩郡平尾調査会1971 P173、174より
2. 佐藤洋 「土器製作技術について」『山口遺跡発掘調査報告書』 仙台市教育委員会1981 P199より
3. 松岡敦子 「六反田遺跡出土縄文土器の底部」『六反田遺跡発掘調査報告書』 仙台市教育委員会1981 P202より
編物圧痕は7型式に分けられⅥ類の「おもて・うら」は、本遺跡のⅢ類「おもて・うら」と同じ編み方である。P212より「無文で分類した中で編物痕の残存する底部外面に更に粘土をつぎたしている例がある。」
4. 上羽明美「底部圧痕」『桑飼下遺跡発掘報告』 京都府舞鶴市平安博物館1975 P125～「網代の編み方」より編み方模式図、分類Ⅸと同じである。

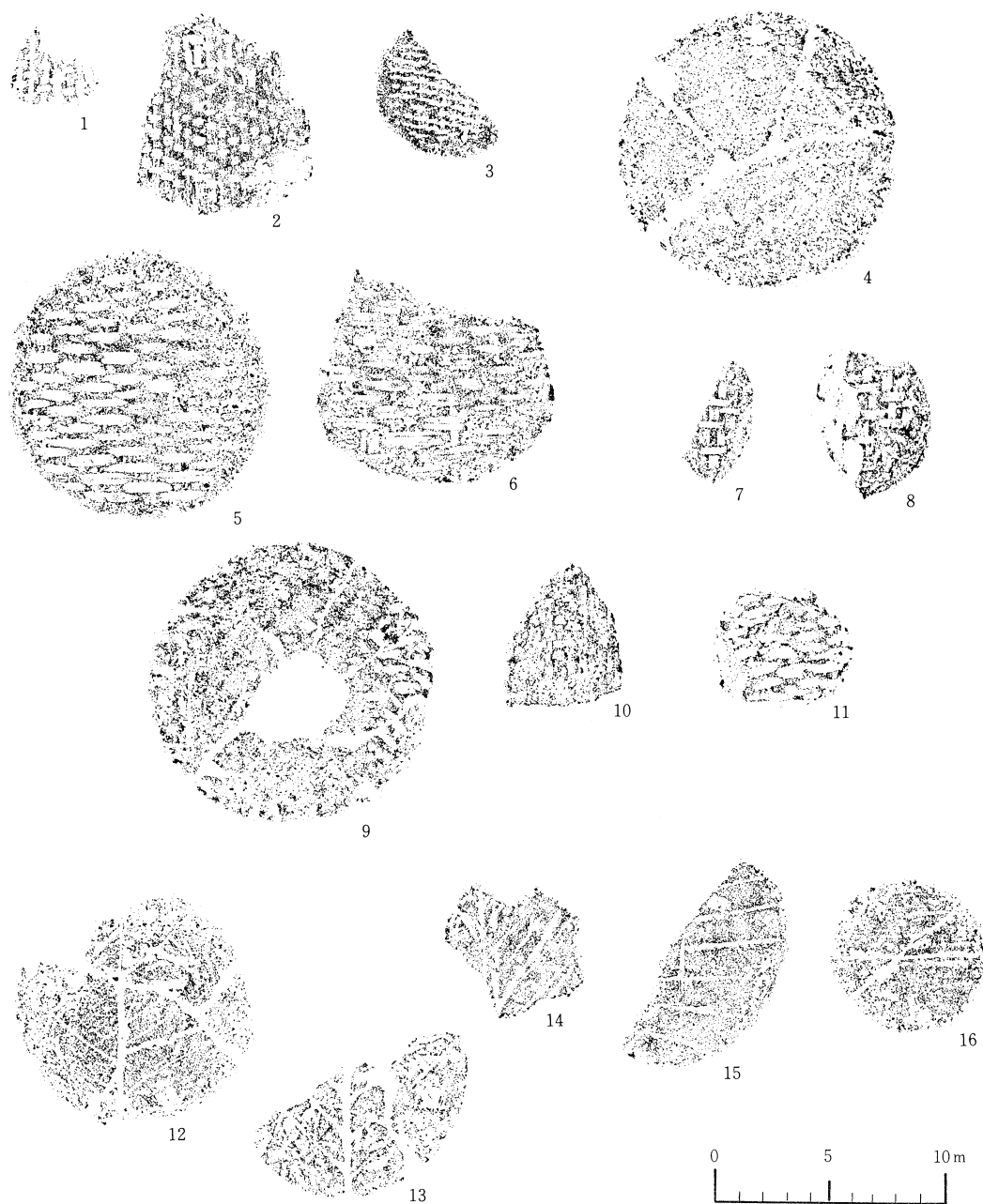
5. 佐藤房枝・田中礼子 「底部資料」『東北自動車道遺跡調査報告書』 宮城県教育委員会1982 編み方は6類にされているが区分されたワクを取りタテヨコを反対にすると本遺跡のⅢ類の「うら」になる。
6. 加藤孝・後藤勝彦 「登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告」『南方町史資料編』1975 P54の拓影、図30の4の底部圧痕が本遺跡のⅢ類の「おもて」の編み方と同じである。
7. 宮城県桃生郡鳴瀬町宮戸島袖窪 袖窪貝塚資料 宮城教育大学考古学研究所蔵資料実見
8. 植松なおみ 「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『物質文化』1980 P20～
9. 丹羽茂他 「上深沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』 宮城県教育委員会1978
10. 丹羽茂他 「菅生田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ』 宮城県教育委員会1982
11. 註9)の報告書で「無文」と分類されているものでも編物痕が認められるものもあり、「編物痕がない」ということではなく、ていねいなミガキにより、編物痕が磨り消された可能性を持っている。
12. 加藤孝・後藤勝彦 『西ノ浜貝塚緊急発掘調査報告』1967
13. 丹羽茂 「大木式土器」『縄文文化の研究 第4巻 縄文土器Ⅱ』 雄山閣1971

参 考 文 献

- (1) 荒木ヨシ 「縄文時代の網代編み」『物質文化』1971
- (2) 草間俊一編 「崎山弁天遺跡」 岩手県大槌町教育委員会
- (3) 額田巖 「竹細工の民族学的研究」『物質文化』7 1966
- (4) 植松なおみ 「東北型網代圧痕について―鳥取市桂見遺跡出土資料の再検討を中心に―」『古代文化』
- (5) 日本観光文化研究所 『暮らしの中の竹とわら』1982
- (6) 『季刊 考古学』創刊号 雄山閣1982
- (7) 宇野文男 「バシー文化圏における土器作り」『季刊人類学』
- (8) 小林行雄 「編物」『続古代の技術』1964
- (9) 後藤和民 『縄文土器をつくる』 中公新書1980
- (10) 新井司郎 『縄文土器の技術』 中央公論美術出版1973

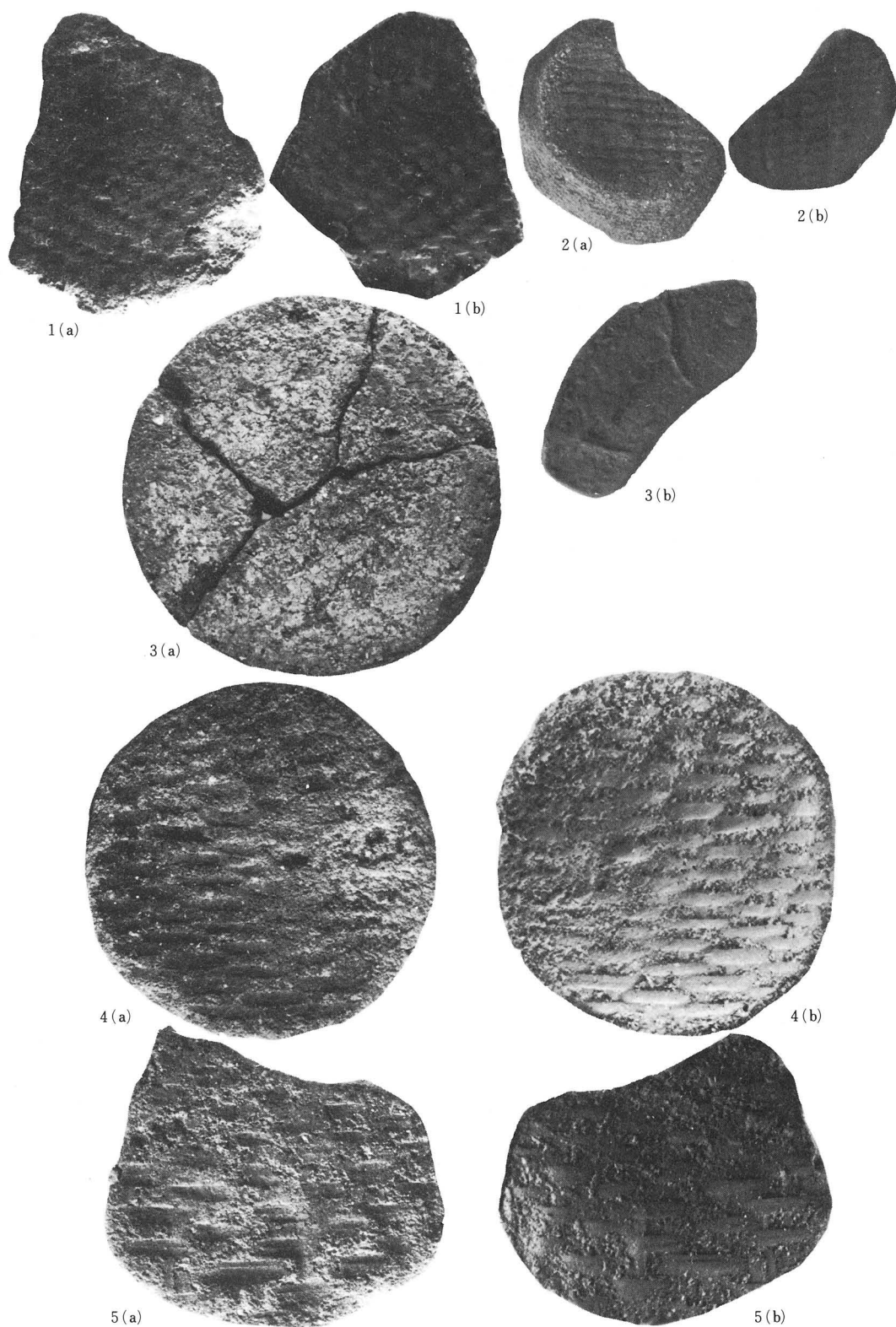


第191図 底部拓影(1)

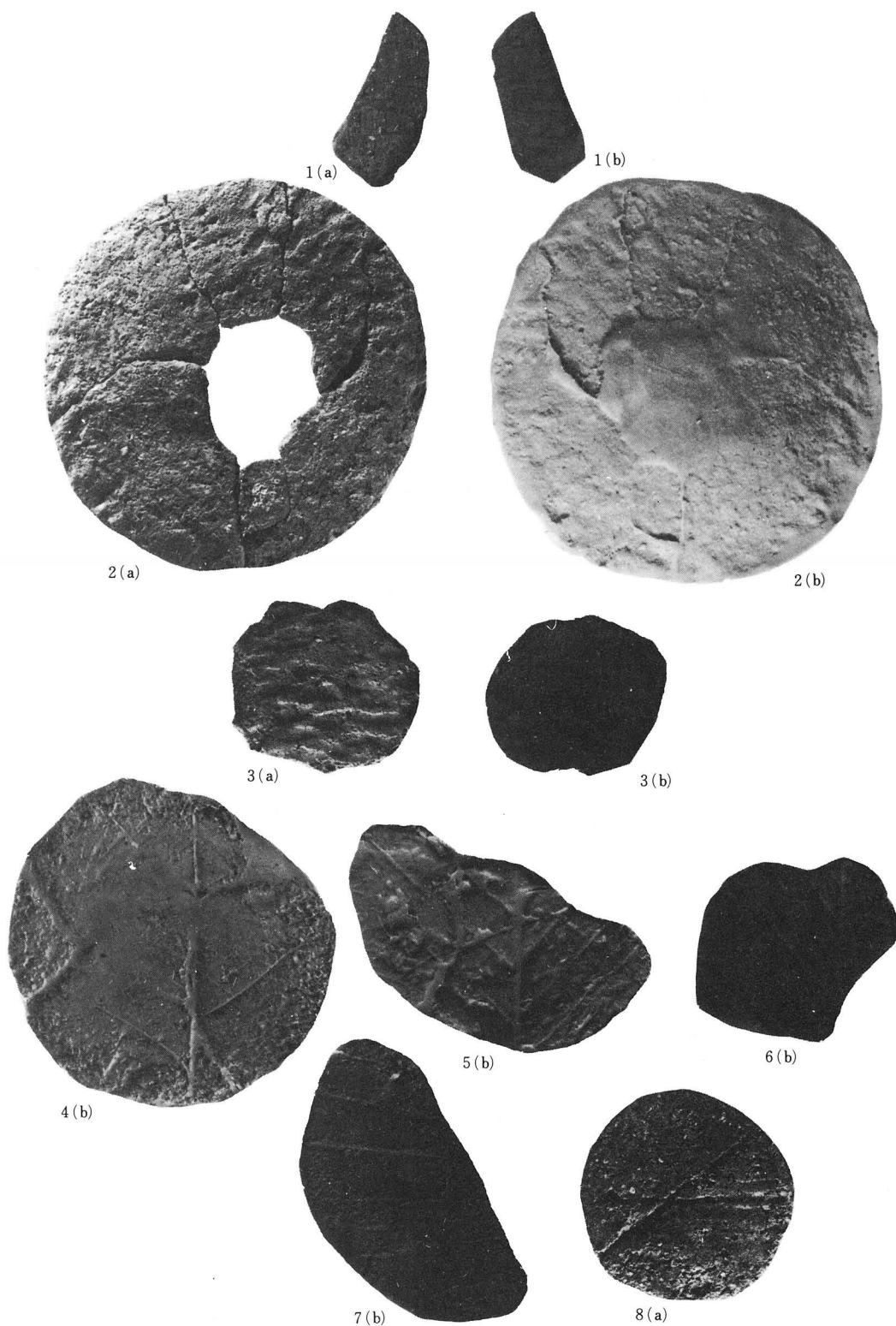


拓影	編み方	写真図版	備考	拓影	編み方	写真図版	備考
1	I 類	—	13D 堆積土 1 層 M-6(d)	9	編み方不明	第194図-2	復元土器 2号埋設土器 K-12(b)
2	I 類	第193図-1	N-6(b) III層	10	編み方不明	—	表 採
3	I 類	第193図-2	第142図 K-12(b) I 層	11	編み方不明	第194図-3	K-7(a) III層
4	II 類	第193図-3	6 D 堆積土 1 層 M-7(c)	12	木 葉 痕	第194図-4	2号住居跡 堆積土 1 層 K-13(a)
5	III類・おもて	第193図-4	K-7(d) III層	13	木 葉 痕	第194図-5	L-6(c) III層
6	III類・おもて	第193図-5	19D 堆積土 1 層 J-8(b)	14	木 葉 痕	第194図-6	20D 堆積土 2 層 N-7(a)
7	III類・うら	第194図-1	J-8(b) I 層	15	不明圧痕	第194図-7	N-7 III層
8	III類・うら	—	K-8(a) III層	16	不明圧痕	第194図-8	20D 堆積土 1 層 N-7(a)

第192図 底部拓影(2)



第193図 底部写真(aは実物、bはモデリング)(1)



第194図 底部写真(aは実物、bはモデリング)(2)